

きのこ特集*

序文

当農学部においては、昭和56年度からプロジェクト研究「有用菌類研究施設の設置のための基礎的調査研究」を近畿大学学内研究助成金の対象研究として開始した。ここに特集する論文は、このプロジェクトの中で遂行された研究成果の一部で、農学部創設25周年を記念して発表されたものである。

わが国の食用きのこ類の生産は近年著しく進展し、種類数においても生産量においても世界最高位を占めるまでに至っている。そして、栽培が都市から比較的離れた農村地域に適しているため、きのこ栽培を加えた複合化によって零細な農家経営の改善と過疎化の防止に果たしてきた役割は著しいものがある。

このようなめざましい発展は、シイタケにおいては純粹培養による種駒種菌の製造法と周年発生技術の開発により、他のきのこにおいては主として屋内におけるビン栽培法の開発によってもたらされたもので、かつて山間地で年間の一定時期に限られていた食用きのこの利用が周年化し、さらに計画的生産によって都市にまで移出されるようになった功績は特筆すべきものである。また、種類によっては天然品と全く異なる形態で用途を開拓し商品化されたものもあり、このようなこれまでの経過は、わが国農業の将来に向かって示唆に富む提言を含むものと言えよう。

当学部においては、栽培きのこ生産改善にかかわる研究が、比較的若い複数の教員によって、すでに互に独立に始められていたが、現在のきのこに関する風潮を考えると、これは決して偶然によるものではないことを感ずる。しかし、学内に直接的な指導者を欠いていたため、研究の統一と拡大にまで至らず、研究遂行上の不便も少なくなかった。

農学科では、近年の栽培きのこ生産のめざましい発展と、部内できのこ研究が行なわれていることに着目し、衣川堅二郎博士に依頼し、昭和55年度の農学特別講義として「有用きのこ学」を開講した。このことが契機となり、翌年には同氏を専任教員として迎えることになった。

本プロジェクトは、部内の栽培きのこ研究者に当時新任の衣川博士を加え、さらに関連する部門の研究者も参加し、互に協力して総合的きのこ研究組織を確立する準備段階として企画された。プロジェクトは本年度まで3年間継続され、昭和59年度からは本格的研究に移行し、体制も形を変えて続行する予定である。現在、組織的な形における研究としては、まだ未熟な段階にあり、ここに掲載された論文は、本プロジェクトの謂わば初めての自己紹介に当たるものであり、今後の成長が、それぞれの続報によって評価されることを望むとともに、ご忌憚ない批判と激励を期待する次第である。なお、このプロジェクトにかかわる研究では、本特集以外にも数篇の論文の刊行または発表がすでに行なわれていることを付記する。

プロジェクト代表研究者 竹内史郎